

2019. 2. 24. 降誕節第9主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教

聖書：列王記上2章1-12節,

『ダビデの死』

列王記上の1章2章にはダビデが最晩年を迎え、そこでしたことの中で二つのことが記されています。一つは、イスラエルの王位継承ということで、自分の後を継ぐもの、自分の後の王さまを指名した、ということです。もう一つは、その自分の王位を継承する息子ソロモンに、最後の戒め、遺言的な言葉を語った、ということです。

一つ目、王位継承ということですが、王位継承権をめぐる、ダビデの息子の中で最も年上だったアドニヤが自分こそが王位を継承する者だと画策します。ところがアドニヤではなく、ソロモンを次期の王さまに、と考える人たちもあり、その両者の駆け引きが1章には記されているのです。ソロモンはダビデが人妻と知って不倫したあのバト・シェバと間の息子です。あの事件のとき、大きな役割を担った預言者ナタンとバト・シェバは協力、画策してダビデに働きかける。ダビデは自分が高齢でしかも死期が近づく中で、王位継承者を指名していなかったのですが、この二人の働きかけの中で、王位を継承する者としてアドニヤではなく、ソロモンを指名します。直ちにソロモンの王の即位式が行われ、油注がれ、ソロモンは王となるのです。その知らせは直ちにアドニヤのもとに届けられる。折しも自分の支援者と共に宴会をしているその場所にその知らせは伝えられ、その場に居合わせたものは皆おののくのです。アドニヤは自分を殺さないよう、ソロモン王に命乞いをし、ダビデの王位継承はここに無血で、戦いなしにしかもダビデ家の中から継承者を立てることになりました。

そして二つ目。ダビデはソロモンに、最後の戒めの言葉、遺言のような言葉を語るのです。戒めの言葉は、あなたの神、主への務めをまもって、その道を歩め、ということでした。律法の言葉をまもり、主の掟と戒めに聞いて歩め、ということです。そうすれば、何を行ってもよい成果を上げることができる、イスラエルの王制は絶たれることがない、ということです。

ダビデの戒めは、それだけではなく、3人の人物に対する具体的な指示がありました。一人はヨアブ。二人目はバルジライ。そして最後にシムイ。

ヨアブはダビデの軍の司令官として、長年ダビデに仕えてきた人物です。いわば側近中の側近でした。けれどもダビデはヨアブとの関係においてずいぶん葛藤を抱えてきました。ヨアブのしたことで、ずいぶん胸を痛め、納得のいかないことがたくさんあったからです。なぜこの人を殺すのだ、ということが重なってきたのです。なかでもサウル王の軍の司令官だったアブネルを殺害したことや、アブサロムの軍司令官アマサの殺害、そして、息子アブサロムを殺害したことについては、いたく傷ついていた。だが、それらはすべて軍の司令官としては、しなくてはならないことをしたのであって、問題はダビデの方にあったのかもしれない。だがダビデにとってはヨアブとの関係はねじれており、ダビデはヨアブを赦していなかった。ソロモンに、ヨアブを安らかに陰府に下ることを赦してはならない、と伝えるのです。

一方バルジライはダビデにとって本当に窮地に陥った時に支えて、助けてくれた恩人でした。その息子たちに最大限の慈しみを与えよというのです。

そして最後にシムイです。シムイはダビデが息子アブサロムと敵味方に分かれ戦ったとき、ダビデが窮地に追いやられたそのときに、ダビデを呪ったもの、嘲ったものでした。ダビデがアブサロムに勝利し、エルサレムに上るとき、部下の一人は、シムイを赦してはならない、といったのですが、ダビデは、その時は赦した。だがダビデはここで、シムイのことを血に染めて陰府に送り込まなければならない、と語るのです。つまりダビデは死ぬ間際、世話になった人と、赦してはおけぬ人をソロモンに告げたということです。これらは読んでいて、相当憂鬱になるようなダビデの言葉です。自分の中での恨みやつらみを最後まで抱えていた、ということでもあります。

先週の聖書個所でわたしたちが聞いたのは、老いてなお、自分の罪に苦しむダビデの姿でした。自分のこれまでの歩みの中で、あたかも自分でそれを成し遂げたかのように思い込んでいく誘惑の前で右往左往するダビデの姿でした。

そして今日の聖書個所ではこれまでの人間関係の中で、自分では清算できないもの、恨みやつらみとして引きずっているもの、それが現れてきているのです。聖書はここで、ダビデの晩年を美化しようとか、まずいものには蓋をしようとは全くしていない。聖書のリアリズムというか、一人の罪人の歩みをそのままに書き記しています。

ダビデは、一方で主の道に従え、主の掟と戒めに歩めと言った。そうすればすべてうまくいくと言った。けれどその一方で自分ではどうしようもない

恨みもソロモンに遺言のように語った。これはダメではないか、まずいのではないか、おかしいではないか、という人もいるし、こういうダビデに対する評価は人によって様々です。だが、わたしたちはこれまでサムエル記に聞き、ずっとサウルやダビデに聞く中で、これはおかしい、などと評論家のように、上からの目線で言うことはできない、ということはもう熟知しています。一方で主の道に歩めと言いつつも、その自分自身が主の道を歩きぬいていない自分がいるのです。ダビデに対する評価が人によっていろいろだ、ということは、当たり前のことですよ。別に特別なことではない。人間が生きるということは、評価はバラバラになっても何の不思議もないのです。自分の中に矛盾や、分裂や、葛藤を抱えているからです。

信仰一途とか、真実一路、とはいかない。

神に向かう自分と神に向かわない自分が分裂したり、葛藤したりしているのです。

だからこそ、主の道を歩む、ということが求められるのです。ソロモンに対して主の道を歩め、主の言葉に聞き、その掟に歩めと言ったダビデの言葉は、きれいごとではない。切実です。真剣です。もし人が主の道を歩むことを放棄するなら、自分が神になってしまうからです。そのことが自分の経験の核になっていくことが求められるのです。

かつてイスラエルには王国がなかった。イスラエルの人々は民の指導者だったサムエルに、王を立てるよう願ったのです。サムエルはその願いの中に、人間の悪を見ていた。だから彼は神に向かって、自分は王を立てることに反対だと言ったのです。神はサムエルをなだめ、王を立てることを望むイスラエルの民の声を聞いた。しかし最初の王サウルも、そしてダビデ王の歩みもわたしたちが見てきたとおりです。そして王位の継承ということにおいても罪をあらわにしました。サウルは退位せよとの神の言葉を退け、ダビデを退けようとし、ダビデは自分の息子と王位をめぐって戦争をしました。人間は一度大きな権力を握ると、そこから離れることがむずかしいのです。そして与えられた役割がある期間神から託された役割であるということを、忘れてしまったり、忘れたふりをするのです。そしていつのまにか、王制の維持ということこそが最も大事なことにすり替わっていくのです。王と王を取り巻く人々との間の権力闘争、利害の絡み合った権謀術策。そこに人間の中にある悪や罪が噴出するともいえます。

しかし、神は人間のあらゆる罪や悪を排して、理想の国家がそこに生まれると考えておられたわけではないでしょう。ダビデが王になろうと、ソロモンが王になろうと、誰が王になろうと、人間は罪人であり、自分の悪の力に翻弄されるものであり、そこから自由、などということはありません。サムエルが王制に反対したことを神はもちろん受けとめたでしょうが、だからといってどんな制度をとったとしても、人間の問題は残るのです。罪人であり、悪に翻弄される人間を神は見捨てず、その人間が神の恵みの中で、神の言葉の中で、用いられ、活かされることをこそ、神が強く願っておられる。拭いても拭いてもとれない汚れや染みのように、わたしたちの中には罪や悪がある。だが、その罪が神において受けとめられ、十字架において赦され、贖われ、新しいいのちの中で活かされていく、それが神の願っておられることです。ダビデの歩みは、そのような神の恵みを指し示しているのではないかと。そしてわたしたちの存在もそのような神の恵みを指し占めていくものとしてあるのではないかと、そのことを受けとめていきたいと思うのです。

D a t a : 降誕節第9主日礼拝説教
讃美 : 前441、後452
新生教会礼拝堂